

地域発見！瀬戸内市を巡ろう！（第1回）

～長船地区 刀剣のふるさと編～

瀬戸内市は、牛窓町・邑久町・長船町の3町から成り立っていますが、それぞれの町には長い歴史と、伝統に培われた郷土の文化・芸能、特産品などがたくさん詰まっています。

今回より各地区にスポットを当て、その地区にまつわる歴史や文化などを紹介し、地域の魅力をお伝えしていきます。

第一回は長船地区の刀剣文化を紹介します。

備前長船といえば「刀剣」というイメージがすぐ浮かぶと思います。元々武器は戦乱の地の付近で作られるはずのものであるにも関わらず、なぜ争乱の都から遠く離れた長船地区が刀の一大生産地になったのでしょうか？



江戸時代の長船地区の地図



福岡の市（一遍上人聖絵より）

★恵まれた環境だった？

長船は吉井川が南北に流れ、東西には山陽道が通り、古くから交通の要所として栄えていました。そのため、中国山地で採集された砂鉄や鍛練用の赤松など刀の材料が集まりやすい地域でした。また、温暖な気候であり食料も豊富に採れ、刀の販売は備前福岡という商業都市で行われたことから刀工にとっては最適の地でした。

★「西の武器庫」と呼ばれていた！

鎌倉時代～室町時代には「鍛冶屋千軒」と呼ばれるほど長船は備前刀の一大生産地になりました。今話題の「山鳥毛」はこの時期に製造されたといわれています。

また国宝の日本刀 111 口のうち、47 口は備前刀と、量・質ともに備前長船地域は刀剣界でトップクラスだったのです。優れた武器を多く作り上げていたことから、長船は「西の武器庫」と言われていました。

★水害による被害

一大生産地として栄えた長船の刀工ですが、安土桃山時代の吉井川大氾濫により町は壊滅的被害を受け、多くの刀匠が流されたといわれています。

その後先の水害から復興した横山藤四郎祐定が岡山藩池田家のお抱え鍛冶を勤めるなど活躍し横山一門は繁栄しました。

長船の刀剣にまつわる観光スポット

備前長船刀剣博物館



全国でも珍しい日本刀専門の博物館。施設内に設けられた刀剣工房、鍛刀場では実際に職人が日本刀を作る様子を公開しています。
開館時間 午前9時～午後5時
休館日 毎週月曜日
(休日の場合は翌日に振り替え)

天王社刀剣の社・靱負神社



昔から刀鍛冶の守護神として刀匠の信仰を集め、鍛刀場の神棚にも祭られています。足利尊氏がこのに立ち寄った際、目の病が治ったといわれ、眼病平癒のご利益があるといわれています。

西方寺慈眼院



鑑真の創建と伝えられ、古くから備前長船の刀匠の霊を供養してきた菩提寺であり、境内には備前長船の流れをくむ最後の刀匠であった横山元之進祐定（注）の墓や彼が寄進した鐘楼があります。

注）鎌倉時代から続いた長船派横山一門最後の刀工。

造剣之古跡碑



大正14年に横山元之進祐定が史跡保存のため私財を投じて建立した碑です。刻まれた文字は、後に第29代内閣総理大臣を務めた犬養毅の筆跡によるものです。

今、瀬戸内市は備前刀の最高峰国宝「山鳥毛」を里帰りさせる取り組みを行っています。



★三鳥毛ってどんな刀？

戦国武将 上杉謙信・景勝の愛刀として名高く、国宝「上杉家文書」の中の「上杉景勝自筆腰物目録」に「山てうまう」と記されていることから「さんちょうもう」と呼ばれています。「山鳥毛」の号の由来は、その変化にとんだ激しい刃文が、「山鳥の羽毛のようだから」とも「山野が燃えるようだから」とも言われています。

★里帰りプロジェクトって？

山鳥毛は現在の長船町福岡で作られた福岡一文字派の作と考えられています。生まれ故郷である「備前長船」の地に里帰りさせることによって地方に優れた文化財を残し、子供たちへの教育や地域の活性化に資するとともに、国内外の人々に日本刀の価値を広め高めていくために行っています。

次回は牛窓地区をご紹介します。

地域発見！瀬戸内市を巡ろう！（第2回）

～牛窓 歴史に彩られた港町編～

牛窓町・邑久町・長船町の3町から成り立つ瀬戸内市は、それぞれの町に長い歴史と伝統に培われた郷土の文化・芸能、特産品がたくさん詰まっています。

各地区にスポットを当て、その地区にまつわる歴史や文化などをご紹介します。地域の魅力をお伝えしていきます。

第2回は、牛窓地区をご紹介します。

牛窓といえば、ギリシャのエーゲ海に例えられるほどきれいな港町であり、前島をはじめ牛窓諸島と阿弥陀山によって大風から守られた天然の良港として、中世から瀬戸内屈指の水運基地として繁栄してきました。では、どのくらい昔から「牛窓」と呼ばれていたのでしょうか？



牛窓海岸

1,300年前もこのような風景を見て歌を詠んだのでしょうか？



神功皇后

左が三韓遠征時、右が応神天皇を産んだ際の様子が描かれたもの（共に牛窓神社所蔵）



神功皇后を襲った牛鬼

（牛窓神社御朱印帳より）
牛鬼を投げ倒している様子が描かれています。

★「牛窓」という地名は万葉集にも詠われていた！？

牛窓は、今の元号である「令和」の出典で話題となった万葉集にも登場しており、次のような歌が残されています。

牛窓の波の潮騒島響(トヨ)み寄そりし君は逢はずかもあらむ

（訳：牛窓の波が立って潮騒が島を響かせるように言い寄られたあなた
もう私には逢いに来てはくださらないのでしょうか。）

この歌は万葉集第十一巻に収録されており、柿本人麻呂が詠んだともいわれています。万葉集は、7世紀後半から8世紀後半頃に編纂された、現存する日本最古の和歌集です。このことから、7世紀の時点で「牛窓」と呼ばれていたことが分かります。

★「牛窓」という名前の由来とは？

では、なぜこの地が「牛窓」という地名になったのでしょうか？これを紐解くにはある人物の伝説と関係があるといわれています。それは、神功（ジングウ）皇后伝説です。

◎神功皇后とは？

第14代仲哀（チュウアイ）天皇の皇后で、第15代応神（オウジン）天皇の母親といわれている人物です。三韓出陣の中心人物であり、仲哀天皇急死後、妊娠中でありながら朝鮮半島に出陣し新羅を討ち、また百済・高句麗をも帰服させ、帰国後応神天皇を産んだとされています。この三韓遠征の際に牛窓へ立ち寄り、数々の伝説を残しています。

◎牛窓に立ち寄った際に伝説が生まれた！

神功（ジングウ）皇后が三韓遠征のために牛窓沖を船で航行していた際、突然牛鬼が現れ、船が襲われました。そこに住吉大明神が老翁（オキナ）の姿となって現れ、その牛鬼の角を掴み投げ倒したのです。

そこから 牛が転ぶ→牛転（ウシマロビ）→ウシマド→牛窓
と変わり現在の地名になったといわれています。

このような神話伝説の中から地名が生まれた牛窓地区を、是非一度巡ってみてはいかがでしょうか？

◀ 牛窓の歴史にまつわるスポット紹介！ ▶

牛窓神社



牛窓海水浴場のすぐそばにある鳥居をくぐり、木々に囲まれた長い石段を登った先にお社があります。神社には神功皇后の御神霊（ゴシンレイ）などを祀っており、家内安全や開運厄祓い、交通安全などを願う参拝者が多く訪れます。毎年10月第4日曜日に例祭を行っており、神輿やダンジリ巡幸などが行われています。

住所：瀬戸内市牛窓町牛窓 2147

万葉集歌碑



牛窓海水浴場のすぐそばにある牛窓神社の鳥居をくぐった先に、今回ご紹介した万葉集の歌碑があります。

今から1,200年以上前に牛窓の海を見ながら歌が詠まれたのだと思うと、なんとも感慨深くなります。

五香宮



牛窓という名の由来となった牛鬼伝説に関係する住吉大明神を祀る神社です。

神功皇后の鎧、太刀、腹帯などが宝物として保存されています。

また古くから航海安全神、安産神として崇められています。

住所：瀬戸内市牛窓町牛窓 2720

纒石（ともづないし）



五香宮近くの海岸にある石で、神功皇后が住吉大明神に参拝するために、船をつないだと伝えられています。

そしてこの場所から男装して三韓遠征へ向かったと伝えられています。

次回は邑久地区をご紹介します。

地域発見！瀬戸内市を巡ろう！（第3回）

～^{せと}邑久 ^{あけぼの}古くから伝わる迫門の曙編～

牛窓町・邑久町・長船町の3町から成り立つ瀬戸内市は、それぞれの町に長い歴史と伝統に培われた郷土の文化・芸能、特産品がたくさん詰まっています。

このコーナーでは各地区にスポットを当て、その地区にまつわる歴史や文化などをご紹介し、地域の魅力をお伝えします。

第3回は、邑久地区をご紹介します。

邑久地区は、瀬戸内海から内陸の吉井川流域まで東西に細長い地域です。東の虫明は、牡蠣の養殖で有名ですが、朝日の美しい場所もあります。一方西の千町平野は、きれいに区画整備された田園地帯が広がっています。今回は邑久地区の東に位置する虫明にスポットを当ててご紹介していきます。



虫明は「海のミルク」牡蠣の養殖が盛ん！
ぷりっとした食感がたまりません！



牡蠣いかだが浮かぶ虫明湾を望む景色は屋でも絶景です！



平忠盛は、諸国の受領を歴任しながら日宋貿易で莫大な富を築き上げ、平家繁栄の礎を作った人物として有名です。

★「虫明」と「裳掛」の地名の由来

現在の住所地名は虫明が使われています。読み方は、ムシアゲ・ムシアケの二通りありますが、公的な場合はムシアゲという呼ばれ方をしています。この地は昔、風光明媚（ふうこうめいび）な海岸で夏の夜の浜辺は海中の夜光虫が光り、その明かりが美しい地域だったことが地名の由来になったと言われています。

昭和33年に邑久町と合併するまでは虫明と福谷を合わせて裳掛村と呼ばれていました。この裳掛という名前は、昔弘法大師がこの地を訪れた時に、汚れた衣を洗って干そうとしたのですが干す所がなく、仕方なく入り江にある岩へ衣を掛けて干したという伝説が由来して裳掛の地名が生まれたといわれています。

★日本の朝日百選に選ばれた美しい景観

邑久地区の東に位置する虫明といえば、多くの人々が牡蠣の養殖が盛んな地域というイメージを持つのではないかと思います。この地域は、瀬戸内海に面したリアス式海岸であるため、中世以降から潮待ち港、風待ち港として利用されていました。

そして何とんでもこの虫明で古くから親しまれてきたのは、虫明漁港東方の海辺から昇る日の出です。特に二百十日（立春から数えて201日目、9月1日前後）に昇る日の出は格別に美しいと評判です。日本の朝日百選では「迫門の曙」で登録されています。また、季節によっては朝日が水平線から昇る際にだるまのような形になる「だるま朝日」が見れる時もあります。

このような美しい景観は、現在の人々だけでなく平安の時代にはすでに多くの人に愛されていました。

★平家もこの地を訪れていた！

虫明から見る美しい朝日は、数々の和歌に詠まれており古くからこの地の景観が親しまれたことが分かっています。その中でもよく知られているのが、平清盛の父である平忠盛が備前守（びぜんのかみ）だった時に虫明に立ち寄り、見た朝日に感動して詠んだ和歌です。

虫明の迫門の曙見る折ぞ都のこともわすれられにけり

（虫明の瀬戸の曙を見る時には、都が恋しいということもわすれてしまう）

遥か太古時代から変わらない瀬戸内海の多島美を見て、悠久の時を感じてみてはいかがでしょうか？

◀ 今回の紹介にゆかりのあるスポットを紹介！ ▶

迫門の曙景観眺望地



大平山にある岡山いこいの村へ向かう途中の道沿いに日本の朝日百選に選ばれた景観眺望地があります。

最も美しい朝日が見られる時期は9月1日頃の前夜一週間といわれ、朝日が昇り始めると空と海、島々は黄金色に染まり、荘厳な景色を見ることができます。

少し早起きをして、先人たちが見て感動した絶景を見に行ってみてはいかがでしょうか？

平忠盛の歌碑



平忠盛が虫明から昇る朝日を見てその美しさを詠んだ歌碑があります。歌碑は岡山いこいの村敷地内にあります。

瀬戸内海の島々が織り成す美しい景観を楽しみながら、館内でお食事をされてみてはいかがでしょうか？

【岡山いこいの村】
瀬戸内市邑久町虫明大平山 5262-11
Tel: 0869-25-0686

裳掛岩



虫明インターを降りて、長島へ向かう途中の入り江に浮かんでいる岩が、弘法大師が衣を掛けたと言われ、地名の由来となった「裳掛岩」です。

海上に浮かんでいるため、直接岩まで行くことはできませんが、その昔は陸続きだったのかもしれません。

地域発見！日本刀の聖地 長船

備前刀の最高峰 国宝「太刀無銘一文字（山鳥毛）」

牛窓・邑久・長船の3地域から成る瀬戸内市は、それぞれの地域に長い歴史と伝統で培われた郷土の文化・芸能、特産品がたくさんあります。各地域にスポットを当て、その地域にまつわる歴史や文化など地域の魅力を深堀していきます。

オンラインゲームなどでお馴染みの刀剣乱舞をはじめとする刀剣ブームで、刀剣に興味を持つ若いファンが一気に増えています。模造刀や刀剣に関する書籍が飛ぶように売れ、刀剣を展示する美術館には若い女性が詰め掛けて、これまで地味だった刀剣の業界も思わぬ盛り上がりを見せえています。

日本刀の制作は、大和国・山城国・備前国・相模国・美濃国の五ヶ国を中心として、各地に名工が輩出されたので、明治以降これを「五ヶ伝」と呼ぶようになります。江戸時代の新刀期になると、これに飽き足らずに、自ら学んだ伝法に他の伝法を合わせて新しい技法を誕生させる者も各地に現れ、その技法は現代刀にも受け継がれています。

その中で、備前国の長船で作られた、備前刀の最高峰 国宝「太刀 無銘一文字（山鳥毛）」は、令和2年3月に個人の方から瀬戸内市が購入し、備前長船刀剣博物館で特別陳列されます。そこで、山鳥毛について深堀しました。

★号の由来、太刀の大きさなどについて

刃文がまるで山鳥の羽毛を並べたような華やかな模様になっているため、「山鳥毛」（さんちょうもう、やまとりげ）と呼ばれています。文化庁では「やまとりげ」のヨミで指定されています。

また、山内上杉家伝来によれば、「蓋シ焼刃ノ美ナル山鳥ノ尾毛、山野ノ燃ユルノ状ニ似タルヲ以テ、其模様ヲ形容シタルモノナリ」とあり、鳥の羽毛に見える、野山が燃える様子に似ているという一文があります。「山焼毛」（さんしょうもう）と呼ばれていたという説もあるようです。



<国宝「太刀 無銘一文字（山鳥毛）」瀬戸内市>

名称	太刀 無銘一文字（山鳥毛）
時代	鎌倉
作者	福岡一文字派
寸法	刃長 79.1 cm 反り 3.3 cm 元幅 3.5 cm 先幅 2.2 cm 鋒長 3.3 cm
重量	1.06kg
指定	昭和 15 年（1940 年）5 月 3 日、旧国宝（重要文化財）指定 昭和 27 年（1952 年）3 月 29 日、国宝指定（新国宝）指定



★来歴について



<上杉謙信>

戦国時代の有名な武将の一人に上杉謙信^{かんとうかんれい※1}がいます。関東管領であった山内上杉家、それを引き継いだ謙信には、天皇家や将軍家から多くの名刀を贈与されているため、逸品に触れる機会が多かったことから、刀の鑑定眼には定評がありました。

弘治2年（1556年）10月（後に謙信を名乗る）長尾景虎が、上州白井に出陣した際に白井城主長尾憲景より「山鳥毛」が贈られているという説があります。

世に出さない「御家名物」として米沢藩上杉家に伝来していました。上杉家の伝来では、国宝指定されている「太刀 無銘一文字（山鳥毛）」は備前国に住んでいた刀工（長船派）の作となっていますが、現在は鎌倉時代の福岡一文字派の作と考えられています。

その後、養子である景勝^{うえずぎ けい おてらびさんじゅうごよう※2}が受け継ぎ、「上杉家御手選三十五腰」にも選ばれていました。

※1 南北朝時代から室町時代に、室町幕府が設置した鎌倉府の長官である鎌倉公方を補佐するために設置された役職名

※2 愛刀家で知られた故謙信の所蔵品のうちから、自身も卓越した鑑定眼で知られた上杉景勝が特に気に入ったものを選抜した名刀リスト

★瀬戸内市による 太刀 無銘一文字（山鳥毛）の購入について

岡山県は、古くから優れた刀剣を数多く生産しており、なかでも「備前長船」として知られる瀬戸内市長船町を中心とした地域は、中世を通じて全国一の日本刀の生産量を誇ります。国宝や重要文化財に指定されている日本刀の約半数を備前刀が占めていることから、「日本刀の聖地」とも呼ばれてきました。一方、現在「備前長船」の刀工は市内で数人のみとなっています。また、当地が刀剣の生産地であったことから全国でも珍しい日本刀を専門展示する「備前長船刀剣博物館」には、国宝・重要文化財級の刀剣は一口も所蔵されていなかったことから、山鳥毛の生まれ故郷である瀬戸内市が購入することで適切に保護・保存し、広く市民等に公開していければ瀬戸内市の象徴・観光資源になると考え、同市は購入や施設整備に必要な5億1309万円の資金集めを税金に頼らず計画されました。ふるさと納税やクラウドファンディングによって、市内外から約1万7千件、総額約8億8千万円の資金を集められました。

「山鳥毛」の里帰りを実現することで、瀬戸内市では、備前長船でのより質の高い刀鍛冶の育成を通じ、日本刀づくりの伝統技術を継承するとともに、備前長船刀剣博物館での刀匠体験や山鳥毛を含む刀の展示、刀と武士、日本の歴史など日本刀文化を知る機会を国内外に提供していくことが可能になると考えられています。<瀬戸内市ホームページより引用>

備前刀の名刀、国宝「太刀 無銘一文字（山鳥毛）」の里帰り特別陳列は9月10日から10月4日まで、会場は同市の備前長船刀剣博物館（9月14日、9月23日、9月28日は休館日）で開催されます。来館される場合は、備前長船刀剣博物館のホームページにより事前予約が必要となります。

詳しくは以下の関連 URL 又は QR コードをご確認ください。

瀬戸内市の URL

<http://www.city.setouchi.lg.jp/token/>



備前長船刀剣博物館の URL

<https://www.touken-world.jp/museum/4667/>



<備前長船刀剣博物館>



地域発見！朝鮮通信史が寄港した町 牛窓

～朝鮮通信使遺跡として国の史跡や重要文化財に指定 本蓮寺境内～
竜頭をモチーフにした船型が多い牛窓のだんじり

牛窓・呂久・長船の3地域から成る瀬戸内市は、それぞれの地域に長い歴史と伝統で培われた郷土の文化・芸能、特産品がたくさんあります。各地域にスポットを当て、その地域にまつわる歴史や文化など地域の魅力を深堀していきます。

牛窓は、古代から「唐琴の瀬戸」と呼ばれ風待ち潮待ちの良港として発展しました。江戸時代には、岡山藩の支配地となり、参勤交代一行や朝鮮通信使（以下「通信使」という。）の停泊港・宿泊地として賑わいました。また、造船の町としても栄えました。明治時代以降は、陸上交通の拡大に伴う瀬戸内の海上交通の縮小によって衰退しましたが、近年はマリンスポーツの好適地として発展し、温暖な気候を生かしたオリーブ栽培や海に沈む夕日の景勝と相まって、「日本のエーゲ海」と呼ばれています。今回は、朝鮮通信使とゆかりがある法華宗 経王山 本蓮寺（以下「同寺」という。）と竜頭をモチーフにした船型が多い独特の形をした牛窓のだんじりを深堀してみました。

★歴史

豊臣秀吉の朝鮮出兵によって朝鮮との交流は断絶していました。しかし、徳川家康は、朝鮮に朱印船を派遣するなどして国交回復に努めました。その甲斐があって、慶長12（1607）年に朝鮮から回答兼刷還史が派遣されました。牛窓港は、岡山県下の瀬戸内海の寄港地の1つで、岡山藩が接待する港として整備されました。寛永元（1624）年から牛窓での接待が始まり、この時から同寺が接待場所となりました。

最初の通信使は、寛永13（1636）年に派遣され、以後、徳川将軍の代替わりごとに派遣されました。当時、対馬から江戸までの各地の大名は使節一行の接待を命じられ、通信使が牛窓港に寄港したときには岡山藩は饗応をしていました。同寺は通信使一行が上陸して宿泊する際の宿舎となり、通信使が詠んだ詩書「朝鮮通信使従事官申満詩書」でそのことが伝えられています。

通信使が使用した客殿の前には、小堀遠州の手によるといわれる庭園があります。



★ユネスコの世界記憶遺産に登録

2017年10月30日に同寺に残されている漢詩「本蓮寺朝鮮通信使詩書」9点（岡山県立博物館に寄託）は、「朝鮮通信使に関する記憶」の一部として国連教育科学文化機関（ユネスコ）の「世界の記憶」（世界記憶遺産）として登録されています。



★国指定重要文化財



（昭和33年5月14日指定）
本蓮寺番神堂



（昭和45年6月17日指定）
本蓮寺中門



（昭和17年6月26日指定）
本蓮寺本堂

★だんじり

牛窓のだんじりは、竜頭をモチーフにした船型のものが多いですが、精緻で迫力がある彫刻が施されています。だんじりの彫物は呂久大工の傑作です。

下の8台のだんじりは御座船のほか、舳先につけられた彫り物によって獅子頭船、竜頭船、麒麟頭船に分けられています。これら8台は総擧作りか、櫓材を主とする作りです。牛窓地区の牛窓神社の秋季大祭（10月第4日曜日）は、岡山藩2代藩主・池田綱政公が延宝4（1676）年復興されて以来340年余りも続いています。同大祭ではこの内5台をみることができます。また、鹿忍地区の鹿忍神社の秋季大祭（10月第2日曜日）では、3台のだんじりをみることができます。しかし、牛窓町は過疎高齢化となっており、これらのだんじりを動かすには世代の若さと人数が必要なため、近い将来動いている勇壮な姿をみることができなくなるかもしれません。



東町地区の御船だんじり



関町地区の竜頭だんじり



中浦地区の麒麟だんじり



紺浦地区の飛竜だんじり



綾浦地区の獅子だんじり



鹿忍沖地区の竜頭だんじり



鹿忍東地区の竜頭だんじり



鹿忍大向地区の唐獅子だんじり

※各だんじりの写真提供…瀬戸内市

新型コロナウイルス感染症の感染拡大で行動制限がありますが、通信使にまつわる法華宗 経王山 本蓮寺、船型が多い独特の形をした牛窓のだんじりを見ることができる牛窓神社や鹿忍神社の秋季大祭などを訪れて異国情緒漂う文化に触れられてみてはいかがでしょうか。



地域発見！宇喜多氏ゆかりの城 邑久

～瀬戸内市指定文化財「砥石城跡」と北に見下ろす「千町平野」～



牛窓・邑久・長船の3地域から成る瀬戸内市は、それぞれの地域に長い歴史と伝統とで培われた郷土の文化・芸能、特産品がたくさんあります。各地域にスポットを当て、その地域にまつわる歴史や文化など地域の魅力を深堀していきます。

千町平野（せんちょうへいや）の北側にある福岡の地には守護所〈しゅごしょ〉が置かれ、『一遍上人絵伝』にも描かれた「市」が行われていたことから、備前国における政治・経済の重要な拠点でした。砥石城は、この福岡の地を一望できる場所に築かれていることから、この地域を掌握するのに欠かせない城の一つでした。今回は、宇喜多氏とゆかりがある「砥石城跡」を深堀してみました。

砥石城

砥石城（といしじょう）は、現在の岡山県瀬戸内市邑久町豊原の千町平野に突き出た標高100mほどの砥石山山頂にあった城です。五連郭の本城と堀切を構えた四郭の出城で構成されていました。砥石城は、「砥石山城」「砥石ヶ城」等とも呼称されていました。

砥石城があった砥石山は、福岡荘や熊山、さらには



吉井川右岸の西大寺を望み、戦術的要衝を始めていたようです。

築城の経緯は定かではありませんが、『備前軍記』等の江戸時代の記録によれば、大永年間（1521～1528年）浦上村宗の家臣、宇喜多和泉守能家（うきたいずみのかみ よしいえ）が築城したものと伝えられています。砥石城は、平成16年11月1日に瀬戸内市指定史跡に指定されています。

宇喜多氏と砥石城

能家は久家の子として邑久郡に住み、備前守護代浦上村宗に仕えていました。村宗の討ち死に後、村宗の二男宗景へ仕えました。1534年（天文3）6月、高取城主島村豊後守の夜討ち



「砥石城跡」邑久町豊原

によって城主能家は自害し落城しました。しかし、主君浦上宗景はこの城を島村氏に与えず、浮田国定（能家の庶腹の弟）に与えました。1547年（天文16）宇喜多直家は、主君宗景の軍勢と合流して、備中三村氏と内通した砥石城主浮田国定を攻め落とし、城主に弟春家を任じました。



宇喜多和泉守能家肖像



宇喜多和泉守直家像

天正9年（1581年）2月、直家は死去しています。享年53歳でした。直家の子秀家は、父が死んだときまだ幼かったため秀吉に育てられ、本能寺の変後に政権を握った秀吉のもとで直家の遺領を安堵され、備前岡山城主となりました。

のち直家が沼城（亀山城）から岡山城に入るとき、春家を沼城に移して部将にこの城を守らせました。

秀吉の晩年期には、秀家は五大老の一人となり、備前・美作・備中半国・播磨3郡の57万4,000石を領し、徳川（255万石）・上杉（120万石）・毛利（112万石）・前田（80万石余）・島津（61万石）・伊達（58万石）に次ぐ第七位の大名となりました。しかし、豊臣政権での交際や体面の維持は莫大な出費となり、また朝鮮出兵においては主力として渡海し数多くの軍役をこなすことを要求されました。

そのような、二度に渡る外征の負担は領民と家臣に重くのしかかって軋轢を生み、キリスト教と日蓮宗の二派に分かれた家中の宗教対立も加わって、秀吉死後の慶長4年（1599年）にお家騒動が起き、多くの重臣が宇喜多氏を離れて家康側に着きました。つづく慶長5年（1600

年）の関ヶ原の戦いでは石田三成とともに西軍の最大の主力として奮戦するものの、敗北して所領を没収されてしまいました。



宇喜多和泉守秀家肖像

千町平野

東西に細長く伸びた平野部を有し、平野の中央を千町川が流れています。千町平野は備前国でも屈指の沃野であり、南西半は古代末以来の豊原荘（（とよはらのしょう）は備前国邑久郡にあった荘園）です。平安時代から奈良時代になっても後鳥羽上皇の領地であったといわれ、元々は朝廷の荘園であったとの説もあります。

また、南北朝の争乱期から戦国期にかけて備前国東部で活躍した多くの名主層を生んだ土地柄であり、後に備前国を平定した宇喜多直家もこの地に出生しています。

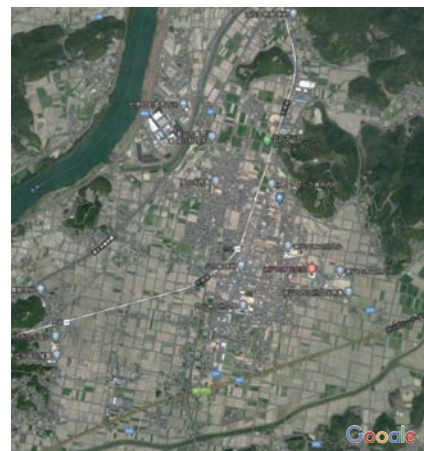
現在では、区画は大きく（1枚約20a）、水は吉井川から大用水を通じてパイプラインによ



り流水されており、岡山県南東部の穀倉地帯となっています。

品種は粒の大きい「アケボノ」が中心で、農地集積率が高く、稲作を中心とした農家（約10ha以上）6戸が形成されています。

千町平野では瀬戸内の温暖な気候や県都岡山市近郊という恵まれた条件のもと米やビール麦などが栽培されています。



上空から見た千町平野



地域発見!黒田家ゆかりのお寺とお城 長船

～教意山妙興寺と福岡城～



牛窓・邑久・長船の3地域からなる瀬戸内市は、それぞれの地域に長い歴史と伝統で培われた郷土の文化・芸能、特産品がたくさん詰まっています。各地区にスポットを当て、その地区にまつわる歴史や文化など地域の魅力を深掘りしていきます。

JR 長船駅から徒歩 20 分ほどのところに教意山妙興寺があります。そこは、黒田官兵衛の黒田家に縁のあるお寺で、近江からこの備前福岡へ移住してきた官兵衛の曾祖父 高政のお墓とその縁者のお墓があります。また、官兵衛の子 長政が、福岡城（福岡県）を築城したときに先祖ゆかりの備前福岡（岡山県瀬戸内市長船町福岡）の地名を取って「福岡」と改めました。これから、官兵衛とゆかりがある「妙興寺と福岡城」や備前福岡の名所を深掘りしてみました。



黒田官兵衛の肖像画

教意山妙興寺

この寺は室町時代に播州からこのあたりまで勢力を持っていた播磨の国主 赤松則興の追善供養の為に今から 620 余年前応永 10（1403）年大教阿闍梨日伝上人によって建立されました。



妙興寺 山門

その後、歴代の佳持として近隣一帯の武家の名門の子弟が迎えられていました。戦国のころは、寺域は二町余十坊一院あり豪壮を誇り備前法華の中心道場として重きをなしました。享保元（1716）年伽藍の大半を焼失したために今日のこの諸堂景観は必ずしも昔日の面影を伝えるものではないそうです。

境内に黒田高政と重隆（官兵衛孝高の曾祖父と祖父）及び宇喜多興家（直家の父）墓碑があります。妙興寺の山門をくぐると、歴史が刻まれた仁王門。阿吽（あうん）一対の金剛力士立像。1626 年の造立を誇ります。幕末から明治初期に行われた彩色修理により、筋骨隆々に生命力に



妙興寺 仁王門

満ちた輝きを放つ二体は迫力があります。金剛力士立像は木造寄木造りで瀬戸内市指定の有形文化財（美術工芸品）に、大銀杏は瀬戸内市指定天然記念物になっています。

福岡城（福岡県）

黒田官兵衛は播磨国（現在の兵庫県）の姫路城で生まれました。軍師として活躍し、多くの城作りに関わった築城の名手で彼が最後に築いた城、それが福岡城でした。

関ヶ原の戦いでは、官兵衛の息子黒田長政が一番の戦功を挙げて、家康から筑前 52 万石を得ました。官兵衛は、長政と共に筑前へと移ります。

まずは、小早川隆景築城の名島城（福岡市東区）に入城しました。長政は立地的に城下町の整備の余裕が無い名島城を廃城とし、近隣の福岡に新城（福岡城）の築城を決定しました。

福岡城（別名、舞鶴城）は、初代福岡藩主の



CGで復元した福岡城の天守閣（類推）

地名であった「福崎」を黒田家再興の地である備前国福岡（現在の岡山県瀬戸内市長船町福岡）にちなんで「福岡」と改めており、これが市名の由来となっています。

名島城の建物は建材として、石垣は石材として

黒田長政が慶長 6 年（1601 年）から 7 年かけて築いた城です。築城の際、もともとの

持ち出され福岡城の資材となりました。福岡城には天守閣が存在しなかったというのが定説でしたが、近年では天守閣の存在をうかがわせる文書の発見などもあり、多くの人の関心をひいています。



黒田長政の肖像画

備前福岡の名所①「福岡の市」



一遍上人絵伝の福岡の市の絵巻

備前福岡は、鎌倉時代になると吉井川の水運に支えられて大いに栄えていました。山陽道周辺に市が発展、福岡市（ふくおかのいち）と呼ばれ、西国一の賑わいで、この市は長く繁栄し、江戸時代まで続いたといわれています。弘安元年（1278 年）に一遍（鎌倉時代中

期の僧侶で時宗の開祖）が布教に訪れて 280 名もの住民が出家したと伝えられています。

その様子は一遍の死後に描かれた『一遍上人絵伝』に描かれています。なお、これには福岡市の様子も描かれており、その繁栄ぶりが全国的に有名となりました。



福岡の市跡

備前福岡の名所②「七つ井戸」

この備前福岡には昔から、飲用、消火用、その他生活用水を得るため、個人井戸の他にその周辺の人々によって管理使用されていた立派な共同井戸がありました。

吉井川地下水のため、井戸水は涸れることなく、水質は極めて良く、大正末頃までは、近くの村から酒造用にと牛車や大八車で水をくみに来ていたといわれています。現在、七つのうち四つの井戸が昔の姿のまま残っています。



地域発見!牛窓の地名の由来と前島の歴史

～牛窓からフェリーで6分 美しい前島～

牛窓・邑久・長船の3地域からなる瀬戸内市は、それぞれの地域に長い歴史と伝統で培われた郷土の文化・芸能、特産品がたくさん詰まっています。各地区にスポットを当て、その地区にまつわる歴史や文化など地域の魅力を深掘りしていきます。

今回は、牛窓の地名の由来と島全体が国立公園の「前島」を深掘りします。



〔大坂城築城残石群〕

前島には「大坂城築城残石群」があります。この残石群は、江戸時代初期（1620年～1629年）に徳川家により再建された大坂城の石垣を切り出した丁場の遺跡です。

石は、矢穴が一直線に入ったものや大割にしたもの、さらには整形して山から下ろす寸前のものまで様々な物があります。

また、残石の中には刻印がまかれたものがあり、これが大坂城の石垣に印されたものと同じであることから、松江藩堀尾家や鳥取藩池田家が前島の石切丁場に関わったことが分かっています。

なお、大坂城築城残石群については過去に2回大規模な調査が行われています。



〔1977年（第1次）の調査結果〕

前島の東半分を占める東山で計4箇所の花崗岩の石切丁場遺跡が確認され、これらの丁場跡では、矢穴が刻み込まれた母岩や二つに大割された巨岩、直方体に小割りされた石材など、石材の切り出し各工程を示す石材数百個が散在している事が確認されました。

また、現大坂城の石垣石に認められる刻印と同様の刻印がされた残石が発見された。

なお、島内には「岩くだし」「丁場」など石の切り出しに関わりがあったと考えられる小字名が残っています。



〔1997年（第2次）の調査結果〕

石の切り出しは、東山の北斜面、標高100m付近に露出する岩盤を選んで行っており、切り出しの際、周辺の土砂を掘削し、岩盤を露出させた可能性がある。

また、標高90～95m付近に作業場（丁場）を設け、石の整形を行っている。

なお、新たに松江藩堀尾家の刻印石も新たに追加発見されました。

〔大鯨供養塔〕

前島フェリーの乗り場近くにあります。

明治時代に湾内に迷い込んだ長さ30mの鯨を漁師さん達が2日間かけて捕獲し仕留めました。

その鯨を供養するための供養塔です。



〔新しい前島〕

近年前島は、人口減少による過疎化が進み空き家や耕作放棄地が増えています。

しかし、最近、田舎暮らしや農業に興味がある20代から30代の若い方達が、岡山市内等より移住されています。

彼らは前島で農業や商売を始められるなど、



自然と共に新しい暮らしを始められています。

また、前島の自然を活かしながらワーケーション事業を始めようとしています。

地域発見!!

糸操り人形師、竹田喜之助

～生誕100年と喜之助人形～

今年は糸操り人形劇界に大きな足跡を残した邑久町出身の世界的な糸操り人形師、竹田喜之助の生誕 100 年の記念の年です。今回の「地域発見!!」では竹田喜之助を深堀します。

■竹田喜之助プロフィール

大正 12 年 (1923 年) 6 月 27 日、呉服商・岡本岩雄の長男として邑久町尾張に生まれる。本名は岡本隆郎（おかもとたかお）、雅号を喜之助。

邑久小学校、岡山第一中学校（現朝日高校）、第六高等学校（現岡山大学）を経て、昭和 25 年 3 月、東京大学第二工学部機械工学科を卒業。

戦前の素朴な人形に優秀な機械工学の知識と技術を導入する一方、人形美術としても評価の高い「喜之助人形」を完成。日本の糸操り人形劇界では不世出の職人・技術者ではないかと言われています。

子どものころから手先が器用で、好奇心もすこぶる旺盛であったと言われており、大学時代は、日本画・仏像・文楽に関心を持ち、義太夫を語り、三味線を弾く学生でした。また、演劇部に所属し脚本を書き主役を演じるなど、演劇への関心も強かった。一方で同人雑誌に投稿し、創作活動にも情熱を傾けていました。

昭和 25 年の大学卒業間近となっても自分の道に迷っていた頃、千葉市内の映画館で上演していた結城孫太郎（後の竹田三之助一座）の糸操り人形劇を観劇し、座長や一座の弟子の情熱に感銘を受け入座を決意し、人形師としての道を歩み始めました。

昭和 30 年、兄弟子の竹田扇之助と竹田人形座を旗揚げし、竹田喜之助となり、同年、東京都指定無形文化財に認定されました。

昭和 32 年、吉永淳一作「雪ん子」を完成。文部省芸術祭優秀賞を受賞し、竹田喜之助の代表作となり、その後も、「つるの笛」「黒姫ものがたり」など多くの民話や童話を手がけました。生涯に制作した人形の数約 2600 体におよび、制作はもとより、自分の作った人形を操ることが喜びであり、その芸は師匠に次ぎ見事であり、感動を呼び起こすもので、国内公演はもちろんのこと、ヨーロッパやアメリカなどの海外公演でも世界的に高い評価を得ています。

しかし、昭和 54 年 (1979 年) 8 月 31 日、北海道講演の稽古の後、バイクで帰宅中に交通事故に遭い、9 月 5 日不帰の人となりました。（享年 56 歳）



百合若

■竹田人形芝居の歴史

竹田人形は古い歴史を持ち、寛文年間（1661 年頃）、からくり芝居を創案した竹田近江に始まります。以後、竹田氏は明治まで 8 代を数えました。

その後、昭和後期に竹田人形座が旗揚げされ、人形作家竹田喜之助を得て世界に竹田の名跡を位置付けています。特に、竹田喜之助は世界で今世紀最高の人形劇人 7 人にも選ばれています。

しかし、竹田人形座は喜之助の死後しばらくして幕を閉じてしまいましたが、現在も門下生が日本各地で活躍をされています。

■代表作「雪ん子」……昭和 32 年制作

“雪ん子”は雪の精の男の子を題材にした物語です。雪ん子は空に住んでいて、空ではノンノさま（月）につかえて雪を降らす仕事をしていました。

ある年の道祖神（サエノカミ）の祭りの日、仕事に飽きた雪ん子は越後のとある村にひとりで降りてきて、そこで、両親を亡くし一人ぼっちの“ふー子”という女の子に出会い、仲良くなりました。

雪を降らす仕事を放りだし遊んでいる“雪ん子”を呼び戻そうとするお月様。

“雪ん子”は、雪深い新潟の山村に伝わる童謡や行事に主題を得てまとめられた幻想の物語です。昭和 32 年に文部省芸術祭優秀賞を受賞しました。



JR赤穂線邑久駅前にある
喜之助人形「雪ん子」



雪ん子

■喜之助人形劇フェスタ

日本の糸操り人形劇界に大きな足跡を残した竹田喜之助さんの偉大な業績を後世に伝えるために、「喜之助人形劇フェスタ」が毎年、瀬戸内市中央公民館にて開催されており、令和 5 年で 34 回目の開催となります。瀬戸内市が内外に誇れる「人形劇文化」を是非味わってみてください。

なお、今年の喜之助フェスタは令和 5 年 11 月 18 日（土）～ 19 日（日）に開催予定です。糸操り人形の奥深さや繊細な妙技を楽しんでみませんか。（写真は昨年チラシ）



瀬戸内市中央公民館



[ご協力をいただいた皆様]

■喜之助人形劇フェスタ市民実行委員会

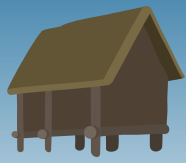
委員長：内田 明生様・実行委員：三木 裕紀様

■写真提供：島 隆諦様

■問合せ先：090-8247-4680

■ <http://www.kinosukefes.com/>



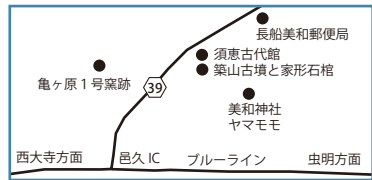


地域発見! 長船町

～古代ロマン 悠久の歴史が甦る 西須恵～



瀬戸内市長船町の西須恵は、古墳時代の中頃、朝鮮半島から伝わった須恵器の生産地でした。
西須恵地区には地名に代表される須恵器窯跡をはじめ、古墳や寺跡など多くの遺跡が分布しています。
今回は瀬戸内市長船町の西須恵地区を深堀りします。



築山古墳 (つきやま)

5世紀後半の瀬戸内市を代表する全長115メートルの前方後円墳です。この古墳は岡山県内では珍しい二重周濠が巡り、墳丘裾とテラス、墳頂部に円筒埴輪が巡らされ、15センチメートル大の角礫の葺き石も葺かれていたようです。後円部には竪穴式石室の一部が露出し、そのなかに阿蘇の凝灰岩製家形石棺（ぎょうかいがんせいいえがたせっかん）が置かれています。（昭和34年 岡山県重要文化財指定）



家形石棺

石棺の蓋が家形を模していることから家形石棺と呼ばれています。阿蘇の凝灰岩（阿蘇山の火砕流によって形成された宇土市産出の石）がこの家形石棺に使用されています。現在の熊本県宇土市から玄界灘、瀬戸内海を経由して運ばれたといわれています。



亀ヶ原1号窯跡 (かめがはらいちごうかまあと)

この窯は、現在までに約130基確認されている邑久古窯跡群にあります。採集された蓋杯・甕などの須恵器片から7世紀前半ころの操業と推測されます。全長約8メートル、幅約1.5メートル、高さ1メートル、中央部あたりの傾斜が30度の地下式の登り窯です。焼成口部と煙道部が自然崩落しているものの大部分の天井部が創業時のまま残っています。

（平成16年 瀬戸内市重要文化財指定）



美和神社ヤマモモ

美和神社本殿北側に御神木として崇められているヤマモモの古木です。この古木は、自生したものと推測され樹齢約300年です。根元の周囲が7メートル、樹高10メートル。地際から10本の太い幹に分かれ八方に広がる枝葉は、南北10メートル、東西15メートルになります。4月ごろに花が咲きます。

（平成16年 瀬戸内市重要文化財指定）



美和神社ヤマモモ



美和神社拝殿

須恵器

須恵器とは、轆轤（ろくろ）を使用し成形したのち、窯を使用して高温で焼き締められた素焼きの土器を指します。これらの技術は、朝鮮半島から渡来人技術者によって伝えられた当時としては新しいものです。その後大阪府南部の陶邑窯跡群で発展し、全国にその技術が広まりました。

長船町西須恵を含む、牛窓町長浜字寒風から長船町磯上字高山にかけての山中に約130基の須恵器窯が確認され、これらは邑久古窯跡群と呼ばれています。

邑久古窯跡群で焼かれた須恵器の特徴は、他の地域のものに比べ多くのものが明灰色（白っぽい）の地肌をしていることです。このため、緑色の自然釉が掛かると美しく映えます。都へ数多く献上されたことが記録や出土品によりわかっています。



西谷遺跡出土須恵器

須恵古代館

高床式建物をイメージして作られた須恵古代館は、周辺の遺跡や神社、畑の中から出土した弥生土器や須恵器などが展示されています。

開館時間 9時30分～17時
（入館は16時30分まで）
開館日 土曜日、日曜日、祝日
（12月29日～1月4日までを除く）
入館料 無料
場所 瀬戸内市長船町西須恵 502-2



須恵古代館外観



須恵古代館展示室



須恵古代館展示物（弥生土器）



須恵古代館展示物（須恵器）



須恵古代館展示物（須恵器大壺）

資料ならびに写真提供
瀬戸内市役所 産業建設部文化観光課

地域発見！ 牛窓町千手

～千手山（弘法寺、遍明院、東壽院）の歴史と鎌倉時代から伝わる千手山弘法寺跣供養について～

千手山は今から約 1300 年前 奈良時代の頃、第 38 代天智天皇勅願寺として報恩大師開創の備前四十八カ寺の一つとして広く知られています。かつては多くの寺院に囲まれ「西の高野」とも云われていましたが、現在の塔頭寺院は遍明院と東壽院の二ヶ寺となりました。

千手山弘法寺について

千手山弘法寺は千手地区に建つ古刹で、山号の千手山は本尊の千手観音菩薩に由来しています。標高90.8mの小高い丘の東斜面に位置しており、岡山城下から牛窓に至る街道“牛窓往来”から南に入った場所にあり、その入口には今も立派な山門が建っています。

参道の石段をのぼりつめたところにある山上伽藍は、本堂と渡り廊下で繋がった如法経堂、多宝塔、鐘楼などがありましたが、残念なことに昭和42年12月30日の大火災で焼失してしまいました。しかし、一つ上段に建つ御影堂は焼損し、常行堂・一切経蔵は火災から免れています。

弘法寺常行堂（瀬戸内市指定需要文化財）

阿弥陀堂とも呼ばれており、天明元年（1781）の再建です。正面三間、側面三間、屋根は重層の寄棟造りで本瓦葺です。「西方浄土」と云われるように西に向いて参拝できるように東向きに配置されています。堂内には丈六大仏（281cm）の阿弥陀如来座像が安置され建物上部の小窓からは阿弥陀像の尊顔が拝礼できます。



常行堂

弘法寺山門（岡山県指定重要文化財）

三間一戸の八脚門で二重層入母屋造、本瓦葺で、享保8年（1723）、上山田村の棟梁尾形久兵衛が再建しました。県下有数の堂々たる大きさの門で、棟高は12.6mあり、大門と呼ばれています。正面に掲げられている額の「千手山」は雲州 松平出羽守によって書かれたものです。



大門

弘法寺跣供養（岡山県無形民俗文化財）

日本三大跣供養の一つで、境内に作られた約40mの行道橋の上で中将姫を極楽浄土へ導くという様を荘厳に劇化したお祭りです。迎え仏の阿弥陀像は、人が頭からかぶる「被り仏」で、全国でも大変珍しい仏様です。行事の最後に行列を迎えに登場します。昭和42年の弘法寺の火災以降中断していましたが、平成9年に復活し毎年5月5日の子供の日に行われています。



跣供養

遍明院について

遍明院は高野山真言宗のお寺で、弘法寺の塔頭です。本尊は平安時代後期に作られた五体の五智如来坐像（国指定重要文化財）、毎年五月五日の跣供養の日には拝観ができます。当時の岡山藩主の信仰も厚く、弘法寺へ参拝の際に使われたであろう御成門や御成りの間などもあります。



遍明院本堂

大薙刀（おおなぎなた）（国指定重要文化財）

遍明院に伝わる大薙刀「盛光」は全長約229.0cm、刃長107.8cm、反り3.2cmもある大薙刀で堂々とした刀身に上品な直刃の刃文を焼き、神仏に捧げられるにふさわしい造形になっており、寺伝では足利尊氏の奉納とされ、その祈りの強さを大きな刃長で表現しています。



盛光

東壽院について

662年開創と伝えられている高野山真言宗の寺院。1211年快慶作の阿弥陀如来像（国指定重要文化財）が本尊です。



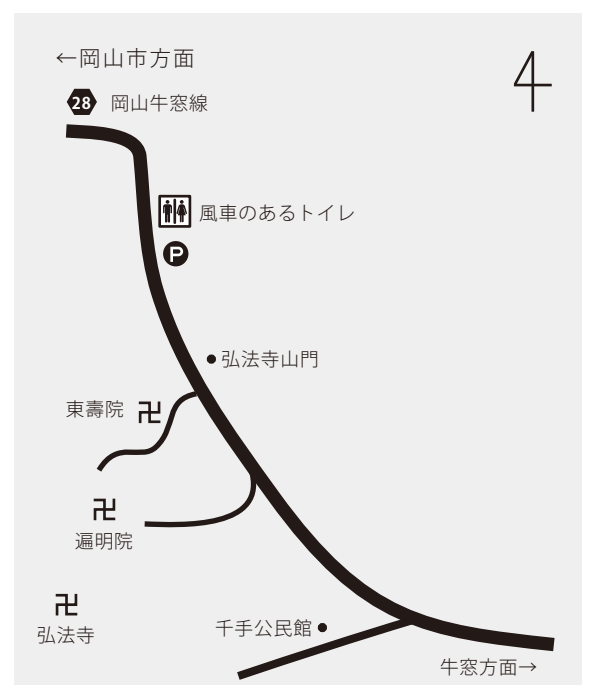
東壽院



東壽院

東壽院阿弥陀如来像について

檜の寄木造で建暦元年（1211）仏師・快慶の作です。胎内から納入文書が発見されており、快慶に仏像を作らせた経緯が記されています。しかし、頭部に火災に遭った形跡があり、頭頂部や後頭部の一部が1604年に補作されています。



資料ならびに写真提供 ・ 遍明院様 ・ 東壽院様

地域発見! 邑久町尻海

～ 錦海湾と尻海の今昔 ～

かつて北前船の船主や漁師の方々が住む村として栄えた「尻海」をご存じですか。

尻海は、江戸時代には「尻海村」でした。享保6年（1721）の「備陽記」によると、尻海村の村柄の特徴について「海辺山寄せ、加子浦」と記されています。加子浦とは藩に対し加子役という船の御用を務める村で、その代わり漁業の特権をもつ漁村という意味です。

また、尻海村の特産物はイイダコとグチだったとの事です。

若宮八幡宮と神田稲荷神社について

若宮八幡宮は、尻海に祀られた神社で、祭神は仁徳天皇・仲哀天皇・神功皇后・大山祇神で、氏子は尻海の西部、市場、中東、大東・敷井地区です。「邑久郡史」によると古くは字大土井カベラに鎮座し、寛正6年（1466）に遷座し現在地へ移りました。

拝殿前に2基1対で立つ総高3.6メートルの石灯籠があります。アーチ状の高い台脚上にのる中台、火袋、笠は宮殿建築をリアルに表現しており、屋根の瓦棒、軒下の垂木を忠実に彫り出した笠の上には阿吽の雲竜を立てています。安永7年（1778）に尻海の薩摩屋藤太夫が寄進したもので、石材は鹿児島県産の反田土石であることが確認されています。（瀬戸内市指定文化財）



若宮八幡宮



石灯籠 2基

神田稲荷神社は、若宮八幡宮の東に祀られています。祭神は倉稲魂命、大己貴命、少彦名尊です。開基は不明ですが「邑久郡史」によると、尻海村の万乗丸が船頭萬右衛門らを乗せ江戸へ航行中、伊豆沖で遭難し転覆し、船員が次々に海に投げ出され、萬右衛門ほか6人が江戸神田稲荷宮に祈願したところ、願いが通じ九死に一生を得ました。その時の御礼として萬右衛門が大願主となり若宮八幡宮の境内に江戸神田稲荷宮の御分霊を勧請したとの事です。

現在の社殿は明治5年に宮大工の井上錦海と鶴峰、仰山によって建てられたもので、本殿には立派な装飾が施されています。毎年2月に会陽が行われていました。



神田稲荷神社



神田稲荷神社本殿



だんじりについて

江戸時代に回船業で栄えた西町、市場町、東町には「だんじり」があり、「尻海だんじり祭り」の際に引き出されています。（瀬戸内市指定有形民俗文化財）



西町だんじり

市場町だんじり

東町だんじり

錦海塩田について

昭和32年（1957）年1月から、尻海から牛窓町師楽までに南北約2千メートルの錦海湾を締め切り、塩田を造成する工事を錦海湾塩田開発が錦海塩業組合により着工しました。1年半かけて工事を行い、昭和33年5月に湾の締め切りが完成。錦海湾の大半500haを干拓し昭和34年4月から枝条架方式の集約塩田として操業を開始しました。

しかし、広大な面積を必要とした枝条架採塩方式も、技術の進歩により専売公社の製塩政策の転換が行われたため塩田式製塩を全廃。昭和46年（1971）よりイオン交換樹脂膜製塩法（海水濃縮方式）の新技术が導入されたため廃田となり、昭和53年（1978）6月、産業廃棄物の最終処分場となりました。



干拓の様子（昭和35年7月）

（撮影：写真のマサモト様）

現在の尻海について

塩作りが行われていた塩田は、現在、日本最大規模のメガソーラー施設となっており、瀬戸内市は当該施設を中核に2050年までに二酸化炭素排出量を実質ゼロにする「ゼロカーボンシティ」を目指しています。



ブルーライン道の駅一本松より撮影



整備された約2キロの錦海堤防の風景

取材ならびに写真のご協力

- ・若宮八幡宮 宮司 川崎様
- ・瀬戸内市役所産業建設部文化観光課様
- ・写真のマサモト様

地域発見! 長船町磯上

～ 湯次神社とりゅうごん様、中世の武士の館跡、堀城跡 ～

長船町磯上は『和名抄』に記載されている石上郷（いそのかみごう）の比定地とされています。

磯上地域は古代から人が住み、稲作や須恵器の生産が行われていました。その技術やノウハウは大陸からもたらされ、中世においても活発な営みが行われました。今回の地域発見! では、長船町磯上の歴史を物語る神社や史跡、城跡などをご紹介します。

湯次神社（ゆつぎじんじや）

磯上の高山に鎮座する旧村社で、祭神は湯次神（弓の君）とされています。当社は「備前国神名帳」に「従五位上湯次明神」とある古社で、もともと家高山に鎮座していましたが、嘉吉元年（1441）に現在地へ遷座したと伝えられています。江戸時代には、神社から約100メートル登ったところに家高山があり、家高八幡宮と称されていましたが、明治3年（1870）に旧号に復し、湯次神社と改めました。



備前焼の狛犬（木村六郎平衛作）



湯次神社

山頂の旗振り台遺跡（旗振り通信）

江戸中期から、大正時代まで大坂堂島の米会所の米相場を各地に伝えるため、旗振りによる通信が行われていました。約1里から4里ごとに中継地点があり、西大平山の山頂に石積遺跡が残っています。

この石の上に登り、遠眼鏡で旗を振っていることを確認し、次の中継地点へ向けて伝えていました。

当時は、九州まで旗振り通信で米相場を伝えており、大阪から岡山まで約20分で送った記録があります。



りゅうごん様と傘鉾、雨乞いの神様

りゅうごん様の上に直径3メートルの竹のフレームに和紙で作った大きな傘（傘鉾）をさすと、りゅうごん様は頭の上の傘を嫌い、その傘を破るために雨が降らせたという言い伝えがあります。

昭和二十年代まで、日照りの時、千貫焚き、百斤洗いとともに行われ、不思議と雨が降ったそうです。

また、この岩に隣接している石積み（横幅約20m、高さ約3m）がありますが、誰が何の目的で造ったのか不明です。



昭和27年当時の傘鉾



りゅうごん様（磐座）



りゅうごん様の石積

堀城跡「奇跡的に残る中世の武士の館跡」

堀城は、磯上の山田集落の南側に一辺約90メートル四角の堀を廻らした武士の館跡で、『改訂邑久郡史』上巻には島村某の居城と記載されています。

近くの湯次神社の棟札に「文明八年領主浦上則元と島村景貫によって再建された」と記載されていた事からも、浦上氏の家臣である島村氏が堀城と深く関わっていた事が伺えます。

現在も堀城周辺部には、堀や土塁跡が残っています。特に北側中央には高さ約3メートルの土塁が残っており、氏神か水神様を祀っていたため、残っているのではないかと考えられています。なお、堀の一部は埋め立てられたため、堀幅が狭くなっていますが、北側の一部に当時の堀幅（約4メートル）と思える場所が残っています。

また、周辺の小字名には「屋敷」「清水」「屋敷添い」「会所」など、中世に武家屋敷が存在した地名が現在も残っています。



空撮写真 ※水色が堀



堀城復元想像図



清水（湧き水）

堀の跡



最後に

近年、パワースポットとして多くの参拝者が訪れているりゅうごん様まで、登ってみました。

湯次神社から徒歩700メートル・標高120mの位置に鎮座するりゅうごん様からは、長船平野を一望することが出来ました。また、吉井川や金甲山、遠くに小豆島を見ることが出来る見晴らしの良い場所でした。



磯上地区と堀城跡



小豆島方面



金甲山方面



地域の皆さんが、りゅうごん様や遊歩道等の管理をされています。長船町磯上地区をこの機会に訪れてみませんか。

取材ならびに資料のご協力 安木義忠 様

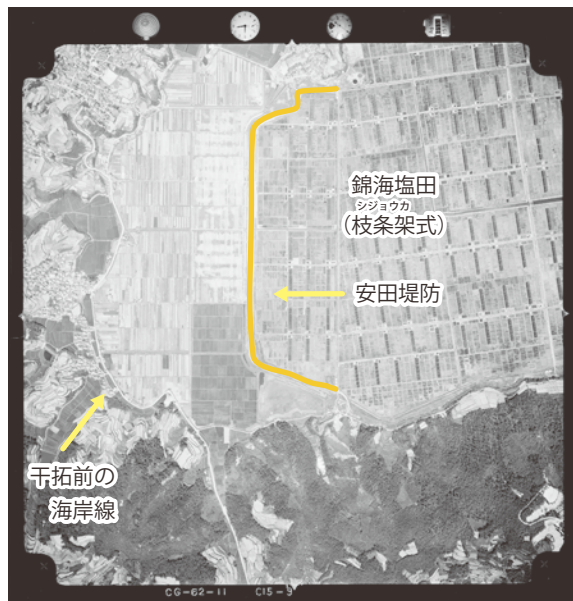
Youtube
「現代によみがえる中世の武士の館 堀城」



地域発見! 牛窓町長浜

～ 国指定史跡 寒風古窯跡群と長浜地区 ～

牛窓町長浜は、錦海湾や長浜湾と呼ばれた海に面した地区で、江戸時代から入江が埋め立てられ、新田や塩田が作られました。錦海湾の景観が大きく変わる開発は、1903年(明治36年)から始まり、1919年(大正8年)に牛窓町字金ヶ崎と長浜村字岡ノ辻を結ぶ「安田堤防」が築かれ、人口増加に伴う食糧増産を目指す干拓が行われました。



出典:国土地理院撮影の空中写真(昭和37年8月20日撮影)
※写真の一部を瀬戸内市商工会で加工

寒風古窯跡群(サブカゼコヨウセキゲン)

瀬戸内市と備前市には、これまでの調査で130基あまりの備前焼のルーツと言われる「須恵器」の窯があったことが分かっています。

その稼働時期は、古墳時代後半から平安時代末(およそ1450年前から1000年前)までの約450年間に渡っています。これらの窯跡は総称して邑久古窯跡群(オクコヨウセキゲン)と呼ばれており、その最南端に位置している牛窓町長浜にあるのが『寒風古窯跡群(サブカゼコヨウセキゲン)』です。



寒風古窯跡群



寒風古窯跡群一帯の空中写真

寒風で焼かれた「須恵器」

須恵器は、古墳時代の中頃(約1600年前)に朝鮮半島から伝えられた新しい技術のロクロ(回転台)や窯を用いて作られました。ロクロを使って製作することによって、大きさのそろった器や硯を多く作れるようになり、窯を使い高い温度で焼くことによって、硬く締まった器を作れるようになりました。

寒風で多く焼かれていたのは、食べ物や供え物を入れる杯や、水などの液体を入れる甕です。

寒風と須恵器の特徴

寒風の窯で焼かれた須恵器の一部は、奈良の都に税金として納められていました。都やお寺など特別な場所で使われる須恵器を製造していたと考えられており、中央政府の影響を受けた窯だったとのこと。



寒風古窯跡群出土の須恵器

寒風古窯跡群で焼かれた須恵器は、白っぽい地肌に緑色の自然釉がかかり、美しい製品が多いことが特徴です。

地元の郷土史家 トキザネモクスイ 氏 (1896～1993年)

1896年(明治29年)長浜村(現、牛窓町長浜)生まれの時實黙水氏(本名、和一)が、1927年(昭和2年)、完全な形のつまみのついた須恵器の杯蓋を拾ったことで、寒風の窯が発見されました。

これをきっかけに時實氏は須恵器に興味を持ち、知識を深め、須恵器の収集や寒風地区等の調査を続けました。そして、調査の成果を纏め、寒風古窯跡群の大切さを訴えてきました。



時實氏が最初に発見した須恵器
(寒風古窯跡群出土)

時實黙水氏 陶像
(寒風陶芸会館中庭)

国の指定史跡へ

1986年(昭和61年)、時實氏が調査研究のために採取した須恵器などによって、備前地域の歴史を考える上で大切な価値のある場所として、寒風古窯跡群が国の史跡に指定されました。寒風が現在まで大切に保存されてきたのは、時實黙水氏と地域の方の努力によるものです。

寒風陶芸会館で 須恵器を身近に感じてみませんか!

展示コーナー【見学は無料】

寒風陶芸会館には、時實黙水氏が収集した物をはじめ、寒風古窯跡群から出土した須恵器が展示されています。



寒風陶芸会館 館内

陶芸体験に挑戦!

「土ひねり」や「絵つけ」などを体験出来る寒風陶芸教室を開催しています。教室から寒風古窯跡群を眺めながら、世界に一つの陶芸作品作りに挑戦してみませんか。

※100人までの団体での体験も可能です。(要予約)



ロクロを使った陶芸体験



■ 寒風陶芸会館(陶芸体験予約先)
住所:瀬戸内市牛窓町長浜5092
電話:0869-34-5680



取材ならびに資料のご協力 公益財団法人 瀬戸内市歴史まちづくり財団 様

地域発見！ 邑久町今城地区

～ 今城の地名は渡来人に由来！？ ～

今城地区は、昔の邑久町今城村に当たり、明治22年（1889）から昭和27年（1952）までの約63年が今城村でした。

「今城」の村名の由来について、「今城村史」によると元は「今木」「今来」と書いたと記されており、今来というのは「いま来た」という意味で、最新の知識をもった渡来人、今来（イマキ）の漢人（アヤヒト）に由来します。瀬戸内市には尻海、師楽など朝鮮半島からの渡来人ゆかりの地名が多く残っており、今来もそのひとつと考えられています。

その後、上寺山の近辺に土着した児島（和田）一族に今木氏があり、居館の跡を「今木城址」と呼んでいたため、「いまき」の地名に「今城」を充てるようになったことにも由来するようです。

今木城跡（邑久町向山）

赤穂線大富駅から西南方向の標高30mの築地山に立地し、千町平野を眼下に一望する東方への眺望に優れており、城館の様相は不明ですが、二郭以上からなる山城と考えられています。

「平家物語」の中に、寿永3年(1184)源氏と平家が今木の城で戦ったことが記されています。

首山(コウベヤマ)の古墳

向山の首山には十一基の古墳があると今城村史には書かれていますが、現在、確認が出来るのは1基だけとの事です。頂上に石棺の蓋だったと思われる平たい石が残っています。



今木城址と首山古墳火回りの看板

大富八幡宮

大富宮山に鎮座し、祭神は品陀和気天皇（ホンダワケノスメラミコト）、息長帯姫尊（オキナガタラヒメノミコト）、比め大神（ヒメオオカミ）です。

嘉暦年中（1326～29）、大富太郎幸範が願主となり本社を改築し、大富八幡宮と称したと伝えられています。



大富八幡宮



神社からの風景(今城小学校方面)



神社からの風景(西大寺方面)

投げ岩様

この大岩は、天狗が山の神様の前で力くらべの岩投げを行ったときに、熊山から天狗が投げた岩だと言われており、この大岩に祈ると天狗の神通力で願いが叶うと言われています。今城に残る巨石信仰の一つです。岩の上には天狗のつまんだ跡と言われる窪みがあります。



取材ならびに資料のご協力

- ・公益財団法人 瀬戸内市歴史まちづくり財団 様
- ・小箕信行 様
- ・有限会社白井建設 様

くろすけ土手

大富郵便局から県道を西へ30m 行くと、北へ向かって長さ88m、幅3mの道路があり、「くろすけ土手」の堤防跡です。

戦国時代のはじめ頃までは、旧吉井川の東岸の土手であったと言われており、対岸に福山の渡しがありました。



くろすけ土手

赤穂線の開通と大富駅

山陽鉄道(現、山陽本線)は計画当初、邑久町内を通る予定でしたが、計画変更が行われ明治24年(1891)9月に大阪～岡山間が開通しました。

しかし、多くの住民が鉄道の開通を望んでいたため、昭和11年(1936)に山陽鉄道の迂回路として赤穂線建設事業が持ち上がり、昭和13年(1938)相生～赤穂間の工事が着工されました。途中、戦争の為、工事が中断しましたが、昭和37年(1962)9月1日に相生駅から赤穂市を経て東岡山駅へ接続する全長57キロが完成し、大富駅が開設されました。その後、昭和44年(1969)10月に電化されました。



大富八幡宮から見た大富駅



参考文献

- ・邑久町史地区誌編
- ・邑久町史通史編
- ・今城ふるさと誌

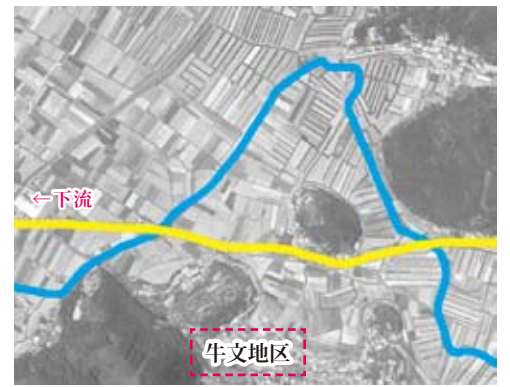
第16回 地域発見! 長船町牛文地域

～ 縄文期は海だった!? ～

長船町牛文(うしふみ)地域は、桂山北部地域の低湿地帯で、縄文期は海だったのではないかとされています。その後、海岸線が後退し、低湿地帯の中を干田川が蛇行して流れていました。

江戸時代には干田川の河川改修で東西に直線の堤防が築かれ、ある程度排水不良が改善されましたが、当時は低湿地帯であったため、牛文沖と呼ばれていました。

古くは内陸部まで海が侵食していたことから、内海が訛って、うしふみに。あるいは、集落の後ろに海があったので、後ろ海が訛ってうしふみと呼ばれるようになったと推測されています。右の写真「出典：国土地理院撮影の牛文地域航空写真(1970年5月18日撮影)で青い線は江戸時代の干田川の流れ、黄色い線は現在の流れ(写真の一部を瀬戸内市商工会で加工)」です。



牛文水門

文政5年(1822年)に、名主入江九一郎守豊と牛文村住民が灌漑の必要性を訴え、水門が築かれ、約170年の間、周辺の灌漑に利用されました。

現在の水門は平成7年(1995年)に激甚災害対策緊急事業で新規に造られ、旧水門は現在地より約200m下流にありました。



現在の牛文水門

瀬戸内市指定史跡 牛文茶臼山古墳と出土品

5世紀末の帆立貝形古墳で、墳長は48m、後円部径33.2メートル、高さ5.5メートル、前方部幅16メートル、長さ14.8メートルです。

竪穴式石室からは四神四獣鏡(しんしじゅうきょう)や小鈴付獅噛文帯金具(こすずつきしがみもんおびかなぐ)、鉄刀、須恵器などが見つかっています。



小鈴付獅噛文帯金具(東京国立博物館所蔵 出典:ColBase)

出土した黄金のベルト。数ある瀬戸内市内で出土した出土品の中でも特に貴重な物です。



四神四獣鏡
(東京国立博物館所蔵
出典:ColBase)

長船中学校
正門近くの案内看板

諏訪神社

牛文の茶臼山に鎮座する諏訪神社の祭神は、建御名方命で、相殿には天児屋根命、事代主命、吉備津彦命、東照大神がまつられています。

夏祭りは8月末頃で、夜には境内の広場で踊りをしています。今は1時間ほど踊るだけですが、昔は盛大で、一晩中踊っていたため「蚊帳なし踊り」と言われており、夏祭りに一回り踊ると安産が出来ると言われています。



諏訪神社の鳥居



蚊帳なし踊り
(写真提供:瀬戸内市文化財保護指導員 入江昌吾様)

八幡宮・古墳

牛文の宮崎地区に鎮座する神社で、祭神は応神(おうじん)天皇、仲哀(ちゅうあい)天皇、神功(じんぐう)皇后です。長船町史によれば、元々桂山にあった桂山寺の鎮守であったが、寺が焼失し廃寺になったのちに現在の地に移ったそうです。また一説には、須恵の美和神社の分霊を勧請したとも言われています。なお、北側の本殿の裏に2基の古墳(円墳・方墳)があります。



寛政12年の年号が刻まれた八幡宮の鳥居
(寛政12年は西暦1800年)

多聞寺・喜右衛門屋敷跡

牛文の一番東の集落を多聞寺と呼び、かつてこの地に多聞寺というお寺があったことにちなんでいます。

長船町の郷土史家・浦上宏さんによれば、多聞寺と隣り合っていたのが鉄関連業に従事した豪族の喜右衛門の屋敷で、その富で多聞寺を建立したと推測されています。



多聞寺屋敷跡

稲荷神社

稲荷山にある神社です。拝殿には、天保4年(1833年)に当所氏子中が奉納した絵馬があります。



稲荷神社

桂山

標高245mの桂山は、牛文・土師地域の最高峰で、約1100年前には山頂に桂山寺が鎮座していました。周辺には牛文茶臼山古墳などの古墳があります。



長船町福里より撮影した桂山。長船中学校が見えます

参考文献
・長船町史
・長船町の文化財
・地名と人々の営み 浦上宏氏 著
・牛文あれこれ 浮田信明氏 著

取材ならびに資料のご協力
・公益財団法人 瀬戸内市歴史まちづくり財団 様